

序

がん医療において緩和ケアは必要不可欠なものになってきました。「緩和ケア」と聞いたときに皆さんは何を想像するでしょうか？ その答えの多くを占めるものの1つが「痛みの治療」なのではないかと思います。

筆者も、そう考えていた一人です。私の緩和ケア/がん疼痛緩和との出会いは、医学生時代に遡りますが、カナダで行っていた臨床実習で緩和ケアチームに帯同していたときに、がん専門看護師のダイアナから紹介された2冊の本でした。そのうち1冊は、Robert Buckman先生の「How To Break Bad News」(恒藤暁/監訳：真実を伝える)であり、もう一冊がRobert G Twycross先生とSylvia A Lack先生の「Therapeutics in Terminal Cancer」(武田文和/訳：末期癌患者の診療マニュアル)でした。これらの本をむさぼるように読んで、少しでも緩和ケアができるようになろうと必死に頑張った記憶があります。今思えば、ダイアナは素晴らしい先生だったと思います。なぜなら、いま緩和ケアで重要なことを2つ挙げると言われたら、私は間違いなく、上記2冊のテーマである「症状緩和」と「コミュニケーション」を挙げたいからです。

本書の対象としては、がん患者さんを診療する機会が多い、がん治療医、病院勤務医、診療所医師を想定しています。そして、本書はがん患者さんの症状緩和のなかでも、最も遭遇する頻度が高い「がん疼痛治療の薬物療法」に絞って、入院治療よりもよりスキルが求められる外来診療で使用できるように、処方の方やコツ、さじ加減、生活指導、ケアの仕方をまとめることで、実際に患者さんの診療に役立ててもらうことを目的としています。

最後に1つだけ、私のとっておきのコツをお教えします。それは、自分の連絡がつく電話番号を教え、電話で連絡を取り合うことでママに経過観察をすることです。こうすることで、患者さんがより身近な存在となり、自分の投薬の結果を即座に、また継続的に知ることができ、ひいては良好な痛みのマネジメントができるようになります。

さあ皆さん、一緒に学んでまいりましょう。

2020年6月

著者を代表して
木澤義之